

C-20 古ゲルマンの服飾とその装いの意味
平安女学院短大 中井長子

目的 ギリシャ ローマに代表されるドレパリーの服装形態とは異質の、身体へのフィットというヨーロッパ服装の本質の萌芽を古ゲルマンの服飾にみとめ得るが、その特性を考察し、ローマ社会から未だ野蛮視されていた古ゲルマンが、親ローマ的要素を多分にとり入れていく過程の中で、彼らほどのような装いの意味をもっていたかきさぐろうとするものである。

方法 タキトスの“ゲルマニア”に記されていることを中心にして、出土された服飾品や、その伝播の様相を考察し、次の三点に要約してみた。①北方民族と身体との露出 ②古ゲルマンの比較的タイトなズボン形式と、サルマティア族、パルティア族のズボン形式との比較 ③古ゲルマンの重要な服飾品である武具、胸かざり、首かざりの意匠の特徴とその装いの意味

結果 古ゲルマン服飾は古くは地中海世界の南方系のものであり、サルマティアをはじめ、東方の民族との接触を通じ、スキタイ、イラン的要素の影響を強くうけたものであること。こういう特性をもった古ゲルマンがローマの傭兵や家僕、奴隸として徐々にローマ社会に慣れ、ローマ市民権を得ることを理想とし、ローマ社会にあこがれ、尊敬して浸入してきた故にローマ化という現象をひきおこす。しかし、かつて森林地帯に住み、狩猟民であった古ゲルマンは、皮を体にフィットさせることに存分の才能を有し、精巧な布を早くから知っていた地中海世界の民族の創り出したドレパリーとは異質の身体造形への装いの意味をもっていた。